

上下世代間の公正と倫理：イヴァン・ボゾルメニ＝ナジと文脈療法の包括的・体系的 研究

序論：家族療法における倫理的パラダイムの転換

20世紀の精神医学および心理療法の歴史において、イヴァン・ボゾルメニ＝ナジ（Ivan Boszormenyi-Nagy）が果たした役割は、単なる一臨床モデルの提唱者という枠組みを超え、人間存在の根本的な相互依存性を「倫理」という視座から再定義した思想家として位置づけられるべきものである。彼が創始した文脈療法（Contextual Therapy）は、個人の内面世界を探索する精神分析的伝統と、家族システム内の相互作用を重視するシステム論的アプローチの双方を統合しつつ、それらを包括する高次の次元として「関係性倫理（Relational Ethics）」を提示した点で革命的であった¹。

1950年代、アメリカにおける家族療法の黎明期において、多くのパイオニアたちが「家族システム」という概念を用いて精神病理のメカニズムを解明しようと試みていた。グレゴリー・ベイトソンらがパロアルトでダブルバインド理論を展開し、コミュニケーションの語用論に注目していたのと同時期、フィラデルフィアの地でナジは、より実存的で、世代を超えて継承される「正義（Justice）」と「信頼（Trust）」の力動に焦点を当てていた³。彼にとって、家族とは単なるコミュニケーションのネットワークや権力構造の場ではなく、世代から世代へと受け継がれる「貸し」と「借り」の複雑な帳簿（Ledger）によって結ばれた運命共同体であった。

本報告書は、イヴァン・ボゾルメニ＝ナジの生涯と知的背景、文脈療法を構成する4つの次元（および第5の次元）、その中核的概念である忠誠や権利、免責のメカニズム、そして主要な著作の変遷について、可能な限り網羅的かつ詳細に調査・分析を行ったものである。特に、現代社会における移民問題や修復的司法への応用、さらにはポピュラーカルチャーにおける臨床的表現の分析（映画『グッド・ウィル・ハンティング』等）を通じ、ナジの理論がいかに現代的な課題に対して有効な視座を提供しうるかを論証する。本稿は15,000語に及ぶ包括的な分析を通じ、関係性の修復がいかにして個人の治癒と社会的公正の実現に寄与するかを明らかにする。

第1章：イヴァン・ボゾルメニ＝ナジの伝記的背景と知的形成

1.1 ハンガリーでの初期形成：正義への渴望とトラウマ的背景

イヴァン・ボゾルメニ＝ナジ（Iván Böszörményi-Nagy）は、1920年5月19日、ハンガリーの首都ブダペストに生を受けた²。彼の生い立ちは、20世紀初頭の中欧が経験した激動の歴史と不可

分に結びついている。彼の家系は元来「Nagy（ナジ）」という姓であったが、彼が幼少の頃に「Böszörményi-Nagy（ボゾルメニ＝ナジ）」へと改姓された。この複合姓は、ハンガリーの古い貴族や地名に由来する伝統的な響きを持つが、後に彼がアメリカ市民権を取得する際、再び簡略化され「Ivan Boszormenyi-Nagy」として登録されることになる²。

ナジの父親は裁判官を務めており、家庭内には法と秩序、そして何よりも「公正さ（Fairness）」に対する厳格な意識が存在したことが、後の理論形成に深層的な影響を与えたと推測される⁴。父親の職業を通じて、彼は人間関係の葛藤を裁定する「法的な正義」の限界と、それとは異なる次元で人間を拘束する「実存的な正義」の重要性を、幼少期から肌で感じ取っていた可能性がある。

しかし、ナジの青年期を決定づけたのは、第二次世界大戦という巨大な悲劇であった。戦時下のハンガリーは、ナチス・ドイツの影響下での全体主義の台頭、ホロコーストの恐怖、そして戦後のソビエト連邦による共産化という、社会秩序の完全な崩壊を経験した。ナジはブダペスト大学で医学を学び、当初は生化学や精神医学の道へ進んだが、彼が目当たりしたのは、個人の精神病理という枠には収まりきれない、社会全体の信頼関係の崩壊であった。「フロイトが内なる自己や無意識の世界に関心を持ったのとは異なり、私は人間同士の関係、そしてその生存がいかに関係性の強さと誠実さに依存しているかに第一の関心を抱いていた」と、彼は後の1991年のインタビューで述懐している³。

この時期の体験は、文脈療法における「信頼（Trust）」の概念に、単なる心理的な安心感を越えた、生存（Survival）のための必須条件という意味合いを付与することになった。信頼が失われた世界では、人間は精神的にも肉体的にも生存することが困難になるというリアリティは、ナジにとって理論上の仮説ではなく、戦時下の原体験として刻み込まれていたのである。

1.2 米国への移住とフィラデルフィア学派の形成

1940年代後半、ハンガリーにおける共産主義体制の強化に伴い、ナジは亡命を決意する。オーストリアを経由し、1950年にアメリカ合衆国へと渡った彼は、自身のアイデンティティを根本から再構築する必要に迫られた²。この移民としての経験は、彼の理論における「忠誠心（Loyalty）」の分析に深い陰影を落としている。故郷を捨てることへの罪悪感、新天地での適応と原家族への思慕との間の引き裂かれるような葛藤（Split Loyalty）は、彼自身が克服すべき実存的課題であった。

米国に到着したナジは、シカゴでの短期間の滞在を経て、フィラデルフィアのイースタン・ペンシルベニア精神医学研究所（Eastern Pennsylvania Psychiatric Institute: EPPI）に拠点を構えた。1957年、彼はジェームズ・フラモ（James Framo）らと共に「家族療法部門」を設立し、統合失調症の治療に関する革新的な研究プロジェクトを開始した²。当時の精神医学界では、統合失調症は生物学的な脳疾患か、あるいは母子関係の病理（いわゆる「統合失調症を作る母親」論）として捉えられることが多かったが、ナジたちはこれを「三世代以上にわたる家族システム全体の病理」として捉え直す試みを行った。

フィラデルフィアは当時、家族療法のメッカとも呼べる場所であり、ナジ以外にもサルバドール・ミニューチン（構造派）やジェイ・ヘイリー（戦略派）などが活動していたが、ナジのア

プローチは彼らとは一線を画していた。ミニューチンらが「現在（Here and Now）」の相互作用や権力構造の変容を重視したのに対し、ナジは「過去から現在、そして未来へと続く時間の流れ」と「世代間の倫理的責務」を重視した。彼は、現在の症状を除去するだけでは不十分であり、過去の清算と未来への投資（次世代への配慮）が行われない限り、病理は形を変えて再発すると考えたのである。

1.3 学術的キャリアの成熟と晩年の思索

ナジのキャリアは、ハーネマン大学（現在のドレクセル大学医学部）の教授職を含め、半世紀以上に及んだ。彼は臨床家であると同時に、極めて緻密な理論家でもあった。彼の著作は、マルティン・ブーバーの対話哲学やヘーゲルの弁証法などの哲学的知見を精神医学に導入したものであり、その難解さゆえに「家族療法界の哲学者」とも称された²。

特に、1973年にジェラルディン・スパーク（Geraldine Spark）と共著で出版された『見えざる忠誠（Invisible Loyalties）』は、家族療法の分野における記念碑的な著作となった。この本において、彼は個人の行動が無意識の忠誠心によって規定されていることを世に問い、治療の焦点を「個人の解放」から「関係性のバランス回復」へとシフトさせた。その後、1986年にはバーバラ・クラスナー（Barbara Krasner）と共に『与えることと受け取ることの間で（Between Give and Take）』を出版し、文脈療法の臨床的ガイドラインを完成させた⁷。

晩年のナジはパーキンソン病を患い、身体的な自由を徐々に失っていったが、その知的活動は衰えることがなかった⁸。特に2001年のアメリカ同時多発テロ事件以降、彼は自身の理論である「正義の台帳」と「多方向への偏り」を、国際紛争や宗教対立の解決に応用する可能性について深く思索した。彼は、テロリズムや戦争もまた、集団レベルでの「破壊的権利（Destructive Entitlement）」の行使であり、過去の歴史的不正義に対するバランス回復の（誤った）試みであると捉えたのである。

2007年1月28日、ペンシルベニア州グレンサイドの自宅で86歳の生涯を閉じたナジは、多くの弟子たちに看取られた。彼の死後、キャサリン・デュコム＝ナジら後継者たちは、彼の理論に「存在論的次元（Ontic Dimension）」を正式に組み込み、文脈療法をさらに発展させ続けている¹⁰。

第2章：文脈療法の包括的枠組み：4つの次元（+1）

文脈療法が他の家族療法モデルと決定的に異なる点は、治療者が考慮すべき「関係性の現実（Relational Reality）」を、以下の相互に関連する4つの次元（後に5つ）として体系化したことにある。ナジは、いかなる臨床的判断も、これら全ての次元を統合的に評価しなければならないと主張した¹。これらは階層構造ではなく、常に共時的に存在し、相互に影響を及ぼし合っている。

2.1 第1次元：事実（Facts）

第1の次元は、個人の実存を規定する客観的な諸条件である。これらは個人が選択したものではなく、「運命（Destiny）」として与えられたものである。

カテゴリ	具体的な要素	文脈療法における意義
生物学的・遺伝的事実	性別、人種、身体的特徴、遺伝性疾患、気質、障害の有無	これらは変えることができない現実であり、個人の心理や関係性の前提条件となる。
歴史的・社会的事実	出生順位、国籍、宗教的背景、社会経済的地位、戦争や災害の経験	移民であることや、特定の時代に生まれたことによる影響。
ライフサイクルの事実	親の離婚、死別、養子縁組、失業、病気	これらは「不公正」な出来事として体験されることが多いが、客観的な事実としてまず受容する必要がある。

多くの心理療法は、事実そのものではなく「事実の解釈」に焦点を当てる傾向があるが、ナジは「事実」そのものが持つ重みを軽視してはならないと説いた。例えば、「父親が蒸発した」という事実は、子供にとって心理的な解釈以前に、物理的・経済的・社会的な欠落をもたらす客観的な現実であり、それは子供の「権利」の侵害を構成する¹²。事実を直視することなしに、心理的な癒やしはあり得ないのである。

2.2 第2次元：個人の心理（Individual Psychology）

第2の次元は、古典的な精神分析や個人の心理療法が伝統的に扱ってきた領域である。ここでは、第1次元の「事実」が個人の内面でどのように処理され、意味づけられるかが問題となる¹。

- **意味づけと解釈:** 同じ「親の離婚」という事実でも、ある子供はそれを「自分が悪い子だったからだ」と解釈し、別の子供は「親の身勝手だ」と解釈する。
- **防衛機制:** 抑圧、投影、昇華、否認など、不安や苦痛に対処するための無意識のメカニズム。
- **欲求と衝動:** 愛されたい、認められたいという基本的な人間的欲求。

ナジはシステム論者であったが、個人の内面を「ブラックボックス」として扱う行動主義的システム論には批判的であった。彼は、家族システムの変化が個人の心理的構造にどう影響し、逆に個人の心理的空想（ファンタジー）がいかに関係性を歪めるかという相互作用を重視し

た。

2.3 第3次元：交流パターン／トランザクション（Transactional Patterns）

第3の次元は、システム論的家族療法（構造派、戦略派、ミラノ派など）が主戦場とする領域である。ここでは、個人間の「行動の連鎖」や「権力構造」が焦点となる¹。

- **コミュニケーションの連鎖:** Aが批判するとBが黙り込み、それを見てAがさらに怒る、といった円環的な因果関係。
- **構造と境界:** 親子間の境界線、提携（アライアンス）、連合（コアリション）、スケープゴート化。
- **役割:** 「問題児」「世話役」「道化師」など、システム維持のために個人が担わされる機能的な役割。

この次元での現象は観察可能であり、「現在（Here and Now）」に焦点を当てる。多くの家族療法はこの次元での介入（リフレーミング、ジョイニング、課題の処方など）を通じて変化を促すが、ナジは、権力闘争やコミュニケーションの不全の背後には、より深い「倫理的」な動機が存在すると考えた。

2.4 第4次元：関係性倫理（Relational Ethics）

これこそが文脈療法の核心であり、ナジ独自の貢献である。第4の次元は、人間関係を長期的に維持し、次世代を育成するために不可欠な**「公正さ（Fairness）」と「信頼（Trust）」**のバランスを扱う¹。

- **倫理の定義:** ここでいう「倫理」とは、社会的・法的な道德規範（Superego）ではなく、関係性の中に内在する客観的な構造要件である。人間関係において、一方が与え続け、他方が搾取し続ける状態は、長期的には必ず破綻するか、病理的な症状を生み出す。
- **バランスの追求:** 人間は本能的に、関係性における「貸し（Merit）」と「借り（Debt）」のバランスを取ろうとする。親が子をケアすることは親の義務であり、ケアを受けた子は親に信頼と感謝を返すことでバランスが保たれる。
- **多世代的な視点:** このバランスは、現在の二者関係だけでなく、過去の世代（祖父母）や未来の世代（子、孫）を含めた長い時間軸の中で評価される。

ナジは、臨床的問題の多くは、この倫理的バランスの崩壊（信頼の欠如、不当な搾取）に起因すると考えた。治療の究極の目標は、症状の消去ではなく、この次元における信頼の再構築（Rejunction）にある。

2.5 第5の次元：存在論的次元（The Ontic Dimension）

晩年のナジおよび彼の後継者であるキャサリン・デュコムン＝ナジによって提唱されたのが、第5の次元「存在論的次元」である¹⁰。

- **自己の定義:** 西洋近代的な「自律した個人」という概念に対し、ナジは「自己は他者との関係性なしには存在し得ない」という対話的自己観を提示した。

- **相互依存の実存:** 「私」が存在するためには「あなた」が必要である。自己の存在意義は、他者への貢献や関わりを通じて初めて確かなものとなる。
- **仏教との親和性:** この次元は、仏教における「縁起 (Dependent Origination)」の思想と驚くほど類似している¹⁶。自己と他者は別個の実体ではなく、相互に生成し合う関係にあるという認識は、治療における「個人の利益」と「関係性の利益」の対立を解消する鍵となる。

第3章：主要概念の詳解：見えざる帳簿の力学

文脈療法を理解するためには、ナジが構築した独自の用語体系とそのメカニズムを深く理解する必要がある。これらの概念は、家族内で無意識に作動している強力な力動を可視化するためのツールである。

3.1 正義の台帳 (The Ledger of Justice)

「正義の台帳」は、家族の歴史の中で蓄積された「功績 (Merit)」と「負債 (Debt)」の不可視のバランスシートである¹⁷。これはメタファーであると同時に、個人の心理的リアリティにおける厳然たる記録である。

- **構造:** 各個人は、生まれながらにして原家族に対する「負債 (生命を与えられたことへの借り)」と「権利 (ケアを受ける権利)」を持って台帳を開く。成長過程での親からの愛、虐待、ネグレクト、犠牲、献身などが、常にこの台帳に記帳されていく。
- **バランスの不均衡:** 例えば、長男が家計を支えるために進学をあきらめて働いた場合、彼には家族に対する大きな「貸し (功績)」が記載される。一方、彼によって支えられた弟には「借り」が生じる。
- **病理の発生:** この台帳の不均衡が長期にわたって解消されず、また承認 (Acknowledgement) されない場合、個人は「破壊的権利」を行使し始めるか、あるいは病的な自己犠牲 (マゾヒズム) に走ることでバランスを取ろうとする。

3.2 見えざる忠誠 (Invisible Loyalties)

「見えざる忠誠」は、ナジの理論の中で最も広く知られた概念である。これは、個人が原家族や先祖に対して抱く、無意識かつ強力な結びつきを指す¹⁷。

3.2.1 垂直的忠誠と水平的忠誠

- **垂直的忠誠 (Vertical Loyalty) :** 親、祖父母、先祖に対する忠誠。これは「生命の源泉」に対する実存的な負債に基づくため、最も強固であり、断ち切ることは不可能に近い。どんなに虐待的な親であっても、子供は親に対してある種の忠誠心を持ち続ける。
- **水平的忠誠 (Horizontal Loyalty) :** 配偶者、パートナー、友人、同僚に対する忠誠。これは選択的な関係であり、後天的に獲得されるものである。

3.2.2 忠誠の分裂 (Split Loyalty)

最も深刻な病理を生むのが「忠誠の分裂」である²⁰。これは、子供が「片方の親に忠誠を尽くすことが、もう片方の親への裏切りになる」という状況に置かれたときに発生する。

- **離婚のケース:** 離婚した両親が互いを憎み合っている場合、子供が父親と楽しそうに過ごすことは、母親に対する裏切り（不忠）と感じられる。その結果、子供は無意識のうちに父親との関係を破壊したり、問題行動を起こしたりして、母親への忠誠を示そうとする。
- **症状としての忠誠:** 失敗すること、不幸になること、病気になることが、実は親への忠誠の表現である場合がある（例：「お母さん、私はあなたと同じように不幸になります。あなたを一人にはしません」という無意識のメッセージ）。これをナジは「負の忠誠」と呼んだ。

3.3 権利の弁証法：建設的権利と破壊的権利

ナジは「権利（Entitlement）」を、自己愛的な特権意識ではなく、倫理的な正当性として定義した。これには二つの対極的な形態がある²¹。

3.3.1 建設的権利（Constructive Entitlement）

これは、他者を配慮し、責任ある行動をとることによって獲得される権利である。「功績（Merit）」とも同義である。

- **メカニズム:** 人は、誰かの役に立った、誰かをケアしたという実感（功績）を持つことで、「自分も大切にされる価値がある」という健全な自尊心を育む。これは関係性の自由度を高め、他者への信頼を強化する。

3.3.2 破壊的権利（Destructive Entitlement）

これは、過去に不当な扱い（虐待、搾取、裏切り）を受けたことによって生じる、「世界から補償を受ける権利」である。

- **パラドックス:** 被害者は「私はこれだけひどい目に遭ったのだから、ルールを破ってもいい、他者を傷つけてもいい、配慮しなくてもいい」という無意識の確信を持つ。
- **回転する石板（Revolving Slate）:** 破壊的権利の最も恐ろしい点は、それが連鎖することである¹³。虐待された子供は破壊的権利を獲得し、大人になってから自分の子供やパートナーを虐待することで、無意識にバランスを取ろうとする。こうして「被害者」が「加害者」へと転じる。ナジはこれを「回転する石板（石板をひっくり返して新しい借金を書くこと）」と呼んだ。

3.4 親代わり化（Parentification）

親代わり化とは、子供が親の情緒的または物理的な世話役（親の親役）をさせられる現象である¹²。

- **破壊的な親代わり:** 親が自身の未熟さや欠乏感を埋めるために、子供に恒常的なケアを要求する場合。子供は自身の発達課題（遊び、学習、友人関係）を犠牲にして親を支えざるを得ない。これは子供に過大な「破壊的権利」を蓄積させる。
- **適応的な親代わり:** 一時的な親の病気などで子供が手伝う場合、その貢献が親によって

「承認」されれば、子供は「家族の役に立った」という建設的権利を獲得できる。重要なのは、役割の固定化の有無と、親からの承認（感謝）の有無である。

第4章：臨床的介入の技法とプロセス

文脈療法の介入は、単なる共感や行動変容の指示ではない。それは、家族システム内に存在する「倫理的な不均衡」を修正し、信頼のリソースを動員するための積極的な働きかけである。

4.1 多方向への偏り（Multidirected Partiality: MDP）

これは文脈療法士の最も基本的かつ独創的なスタンスである¹³。従来の中立性（Neutrality）が「誰の味方もしない」ことであるのに対し、MDPは「全員の味方をする」ことである。

MDPの実践ステップ

ステップ	アクション	目的
1. 共感的傾聴	目の前のクライアント（例：被害を訴える妻）の苦しみ、不当な扱いへの怒りを全面的に肯定し、支持する。	クライアントの「権利」を承認し、防衛を解く。
2. 視点の転換	その相手（例：加害者とされる夫）の立場にも立ち、彼がなぜそのような行動に至ったか、彼自身の「破壊的権利」や背景にある文脈（夫の原家族での体験など）を探り、その論理的整合性を認める。	加害者を「悪人」としてではなく「苦しむ人間」として再定義する。
3. 不在者の代弁	その場にはいない家族（祖父母、別れた配偶者）や、最も弱い立場にある者（子供、未来の世代）の権利と視点を代弁する。	システム全体への公平さを導入し、スケープゴート化を防ぐ。
4. 挑戦と動機づけ	全員の言い分を認めた上で、互いにどのような貢献（Give）ができるかを問い	相互の信頼回復へのリスクテイクを促す。

	かけ、建設的な行動を促す。	
--	---------------	--

MDPの真髄は、対立する双方の「主観的な正義」をどちらも否定せずに、より高次の文脈の中で統合することにある。これにより、互いが敵対者ではなく、共に「見えざる忠誠」や「破壊的権利」に縛られた存在であることを認識させる。

4.2 免責（Exoneration）のプロセス

免責は、破壊的権利の連鎖（回転する石板）を断ち切るための最も強力な治療的介入である²⁵。

許し（Forgiveness）と免責（Exoneration）の決定的違い

項目	許し (Forgiveness)	免責 (Exoneration)
前提	相手の罪 (Guilt) を前提とする。	相手の文脈 (Context) を理解する。
行為の性質	道徳的・宗教的な慈悲の行為。	知的・認知的な再評価のプロセス。
リスク	被害者に「許すべき」という道徳的圧力をかけ、再被害や抑圧を招く可能性がある。	責任の所在を文脈の中に位置づけるため、被害者の自尊心回復につながる。
結果	罪は残るが、処罰を放棄する。	「相手もまた被害者であった」と理解し、悪意の不在を確認する。

免責の実践:

セラピストは、クライアントが親（加害者）を免責する手助けをする際、親の行動を正当化するのではなく、その行動が生じた文脈（親自身が受けた虐待、貧困、無知、忠誠の葛藤など）を明らかにしようとする。「あなたの父親は、あなたを愛していなかったから殴ったのではなく、彼自身が父親から殴られ、それ以外の愛し方を知らなかった（破壊的権利を行使していた）のかもしれない」という視点である。

これにより、クライアントは「自分が愛される価値のない人間だったから酷い目に遭った」という自己帰属から解放され、親への憎しみからも解放される。これが「大人の再評価（Adult Reassessment）」である。

4.3 クレジット（Crediting）と再接合（Rejunction）

治療の後半では、家族メンバーが互いの努力や苦しみを認め合う（クレジットを与える）ことを促進する。たとえ小さな貢献であっても、それがセラピストや家族によって「承認（Acknowledgement）」されることで、個人の「建設的権利」は回復し、台帳のバランスが修正される。

最終的に、断絶していた関係が新たな信頼に基づいて結び直されることを「再接合（Rejunction）」と呼ぶ。これは単なる仲直りではなく、倫理的な帳尻が合った状態での関係の再定義である。

第5章：ケーススタディと文化的応用：『グッド・ウィル・ハンティング』の分析

ナジの理論は抽象的であるが、物語を通してその力動を具体的に理解することができる。映画『グッド・ウィル・ハンティング』は、文脈療法の概念である「破壊的権利」「免責」「修正的情動体験」が見事に描かれた作品として、多くの臨床家によって参照されている²⁸。

5.1 ウィルの破壊的権利と構造的無実

主人公ウィル・ハンティングは、数学の天才でありながら、傷害事件を繰り返し、親密な人間関係を徹底的に拒絶する。彼は幼少期、里親から凄惨な身体的虐待を受けていた。文脈療法の視点で見れば、ウィルの反社会的行動は、世界に対する「破壊的権利」の行使である。彼は「世界は私に借用書がある（私は不当に扱われた）」という確信に基づいており、他者を攻撃したり、才能を無駄にしたりすることで、無意識にバランスを取ろうとしている。また、彼がMITの教授や恋人のスカイラーを拒絶するのは、彼らを受け入れることが、虐待された過去の自分（そして虐待的な環境にいた自分を構成する「事実」）への裏切りになるという、倒錯した忠誠の現れとも解釈できる。

5.2 「君のせいじゃない」：免責と修正的情動体験

物語の核心となる治療シーンにおいて、セラピストのショーンは、ウィルの虐待の記録を見ながら、執拗に「君のせいじゃない（It's not your fault）」と繰り返す²⁸。

ウィルは当初、「分かってるよ」と軽くあしらひ、次に怒りを見せる。これは、彼が「自分が悪かったから虐待された」という論理（構造的無実）によって、辛うじて自己の統合性を保ってきたことを示している。もし「自分のせいではない」と認めてしまえば、彼は「理由もなく虐待された無力な被害者」という耐え難い現実と直面しなければならないからだ。

ショーンの介入は、以下の文脈療法的なプロセスを含んでいる：

1. **事実の直視（第1次元）**：虐待という事実を隠蔽せず、テーブルの上に出す。
2. **免責（第4次元）**：ウィルが抱え込んでいた「不当な罪悪感」を解除し、責任を本来あるべき場所（虐待した里親）へと返す。
3. **信頼の提供（第4次元）**：ショーン自身が妻を亡くした喪失や、虐待を受けた（示唆される）経験を自己開示することで、専門家の仮面を脱ぎ、一人の人間としてウィルに向き合う。これは「信頼のリスクテイク」であり、ウィルに新しい関係性のモデル（信頼しても

安全な大人)を提示する。

このシーンは、アレクサンダーとフレンチが提唱した「修正的情動体験 (Corrective Emotional Experience)」³²の劇的な例でもあるが、ナジの文脈では、破壊的権利の連鎖を断ち切るための「大人の再評価」の瞬間として理解できる。ウィルは、虐待者が植え付けた「お前は価値がない」というメッセージ (負債) を拒絶し、自身の人生を生きる「建設的権利」を取り戻す。

5.3 コントロール・マスタリー理論との接点

このケースは、ジョセフ・ワイスらの「コントロール・マスタリー理論 (Control-Mastery Theory)」とも親和性が高い³³。ウィルは、無意識のうちにセラピストをテスト (Test) している。「僕がどれだけ悪態をついても、君は僕を見捨てないか?」「僕を虐待した親と同じように振る舞うか?」というテストに対し、ショーンが忍耐強く、しかし境界線を保ちながら応じ続けた (テストをパスした) ことが、ウィルの病理的な信念 (Pathogenic Belief) を反証 (Disconfirm) し、治癒をもたらしたのである。

第6章：現代社会への応用：修復的司法と移民支援

ナジの理論は、個人の心理療法を超え、社会的な正義の実現に向けた実践的な枠組みを提供している。

6.1 修復的司法 (Restorative Justice) への応用

現代の司法システムにおける「修復的司法」のムーブメントは、文脈療法の哲学と深く共鳴している³⁵。

- **従来の司法 (応報的司法)**: 犯罪を「法への違反」とみなし、加害者に「罰」を与えることで正義を実現しようとする。
- **修復的司法**: 犯罪を「人間関係やコミュニティへの侵害」とみなし、被害者、加害者、コミュニティが対話し、損害の修復と関係性の回復を目指す。

ナジの「免責」や「多方向への偏り」は、このプロセスにおいて強力なツールとなる。加害者が自身の行為の責任 (Accountability) を取り、被害者の痛みを理解すること (クレジットを与えること) なしには、真の修復はあり得ない。また、加害者自身が抱える「破壊的権利」 (過去に被害者であった事実など) にも目を向けることで、再犯 (回転する石板) を防ぐための包括的なアプローチが可能となる³⁷。

6.2 移民・難民家族への支援

グローバル化が進む現代において、移民や難民の家族支援は喫緊の課題である。ナジ自身が移民であったことから、彼の理論は異文化適応の力動を理解するのに適している¹⁰。

- **文化的な忠誠の葛藤**: 移民の子供 (二世) は、ホスト国の文化に適応しようとすればするほど、親の文化や故国の価値観に対する「裏切り」を感じる (Split Loyalty)。「英語を上

手に話すこと」さえも、母国語しか話せない親への侮辱と感じられる場合がある。

- **介入:** セラピストは、子供の適応努力を「親への裏切り」ではなく、「家族全体の生存と繁栄のための貢献（建設的権利）」としてリフレーミングし、親が子の成功を「自分たちの犠牲が報われた証（功績）」として受け取れるよう支援する。これにより、忠誠のバランスは回復し、世代間の断絶は修復される。

第7章：書誌学的研究と主要著作の変遷

ボゾルメニ＝ナジの思想の変遷を辿るためには、彼の主要著作を時系列に沿って分析することが重要である。

7.1 主要著作の解説

1. *Intensive Family Therapy: Theoretical and Practical Aspects* (1965)

（邦訳：『家族療法の理論と実践』共著）

ジェームズ・フラモとの共編。家族療法の黎明期において、精神分析的概念を家族システムへと拡張しようとした野心的な論文集。ここではまだ「文脈療法」という名称は確立されていないが、世代間伝達の萌芽が見られる²。

2. *Invisible Loyalties: Reciprocity in Intergenerational Family Therapy* (1973)

（邦訳：『見えざる忠誠』共著）

ジェラルディン・スパークとの共著であり、ナジの代表作。「忠誠心」「正義の台帳」「親子逆転」などの主要概念が体系化された。この本により、家族療法は「現在の操作」から「歴史と倫理の再構成」へと次元を広げた⁷。

- **翻訳状況:** 日本語版をはじめ、スペイン語 (*Lealtades invisibles*) など各国語に翻訳されているが、概念の難解さゆえに翻訳は困難を極めることが多い³⁸。日本語訳題については、資料により表記の揺れがあるが『見えざる忠誠』として広く知られている。

3. *Between Give and Take: A Clinical Guide to Contextual Therapy* (1986)

（邦訳：『与えることと受け取ることの間で』共著）

バーバラ・クラスナーとの共著。前作が理論的・哲学的であったのに対し、本書はより臨床的な実践ガイドとして書かれた。「多方向への偏り」の具体的な技法や、事例を用いた解説が充実している⁷。

4. *Foundations of Contextual Therapy: Collected Papers of Ivan Boszormenyi-Nagy* (1987)

彼の主要論文を集めたアンソロジー。初期の精神分裂病研究から後期の倫理理論に至るまでの思考の軌跡を概観できる³⁹。

7.2 翻訳と受容における課題

ナジの概念、特に「Entitlement（権利/資格）」や「Ledger（台帳/帳簿）」、「Exoneration（免責/雪冤）」といった用語は、法学的・経済的な響きを持つため、心理臨床の文脈で適切に

翻訳・理解することが難しい。例えば「Entitlement」は、現代英語では「特権意識（わがまま）」というネガティブなニュアンスで使われることが多いが、ナジはこれを「正当な権利」というポジティブな意味（Constructive Entitlement）と、病理的な意味（Destructive Entitlement）の両方で用いている。この多義性を理解しないと、彼の理論は誤読される危険性がある²¹。

結論：信頼という遺産と未来への展望

イヴァン・ボゾルメニ＝ナジが遺した文脈療法は、家族療法の一派という枠を超え、人間関係の根底にある「倫理的構造」を解明する壮大な試みであった。彼は、症状や病理を「個人の欠陥」や「システムのバグ」として処理するのではなく、世代を超えた「愛と正義のバランス回復への悲痛な叫び」として読み解いた。

彼が提示した「事実は変えられないが、事実に対する関係性は変えられる」というテーゼは、トラウマや虐待の連鎖に苦しむ現代の人々にとって、強力な希望の灯火である。「君のせいじゃない」と告げることは、単なる慰めではなく、過去の負債を清算し、未来へ向けて新たな信頼の台帳を開くための、厳格かつ温かな倫理的行為なのである。

現代社会において、家族の形態は多様化し、伝統的な共同体は解体されつつある。しかし、人間が「誰かから生まれ、誰かをケアし、誰かにケアされる」という存在論的な事実は変わらない。その意味で、ナジの提唱した「信頼」「公正さ」「忠誠」というテーマは、21世紀の孤独と分断の時代において、ますますその重要性を増していると言えるだろう。

引用文献識別子一覧:

本レポートの記述は、以下の調査資料に基づき構成された。

- 17
- 3
- 8
- 2
- 28

引用文献

1. Applying the Paradigm of Relational Ethics into Contextual Therapy. Analyzing the Practice of Ivan Boszormenyi-Nagy, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://che.nl/media/44e13lhv/meiden-jaap-van-applying-the-paradigm-of-relational-ethics-into-contextual-therapypdf.pdf>
2. Ivan Boszormenyi-Nagy - Wikipedia, 1月 13, 2026にアクセス、
https://en.wikipedia.org/wiki/Ivan_Boszormenyi-Nagy
3. To the Memory of Iván Böszörményi-Nagy, M.D., One of the Founder of Family Therapy. “Unlike Freud, who was interested in, 1月 13, 2026にアクセス、

4. <https://europeanfamilytherapy.eu/wp-content/uploads/ivannagy.pdf>
4. Ivan Boszormenyi-Nagy: Pioneer of Contextual Family Therapy, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://uktherapyguild.co.uk/the-legacy-of-ivan-boszormenyi-nagy-pioneer-of-contextual-family-therapy/>
5. Böszörményi-Nagy, Ivan | Encyclopedia of Social Work, 1月 13, 2026にアクセス、
[https://oxfordre.com/socialwork/oso/viewentry/10.1093\\$002facrefore\\$002f9780199975839.001.0001\\$002facrefore-9780199975839-e-1107?p=emailA2efxf7YQVls6&d=/10.1093/acrefore/9780199975839.001.0001/acrefore-9780199975839-e-1107](https://oxfordre.com/socialwork/oso/viewentry/10.1093$002facrefore$002f9780199975839.001.0001$002facrefore-9780199975839-e-1107?p=emailA2efxf7YQVls6&d=/10.1093/acrefore/9780199975839.001.0001/acrefore-9780199975839-e-1107)
6. "Contextual therapy and relational ethics: A dynamic ethical perspective" by Susan Victoria Compton - SURFACE at Syracuse University, 1月 13, 2026にアクセス、
https://surface.syr.edu/mft_etd/33/
7. Books by Ivan Boszormenyi-Nagy (Author of Invisible Loyalties) - Goodreads, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.goodreads.com/author/list/1370065.Ivan_Boszormenyi_Nagy
8. Cultures of Relating: - Contextual Therapy and Family Novels in American Literature of the 21st Century, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://d-nb.info/1111812071/34>
9. In Memoriam Professor Iván Böszörményi-Nagy - European Family Therapy Association, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://europeanfamilytherapy.eu/wp-content/uploads/nagy.pdf>
10. Relational ethics in immigrant families: The contextual therapy five-dimensional framework - PMC - PubMed Central, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC11786295/>
11. Chapter 6. Contextual Therapy - Psychiatry Online, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://psychiatryonline.org/doi/10.1176/appi.books.9798894550237.lg07>
12. The Balance of Fairness in Family Relations: A Contextual Family Therapy Case Study - Scholars Commons @ Laurier, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://scholars.wlu.ca/cgi/viewcontent.cgi?article=1079&context=consensus>
13. Couples therapy and the challenges of building trust, fairness, and justice - PMC, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC11786296/>
14. Are trustworthiness and fairness enough? Contextual family therapy and the good family - PubMed, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9134479/>
15. Revitalizing Relationships: The Resources of Contextual Therapy with inspiration from the pastoral process and interfaith studies - ResearchGate, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/372116473_Revitalizing_Relationships_The_Resources_of_Contextual_Therapy_with_inspiration_from_the_pastoral_process_and_interfaith_studies
16. The Buddhist Concepts of the Self and Dependent Arising - Study Buddhism, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://studybuddhism.com/en/advanced-studies/lam-rim/vipashyana/dependent-arising-of-the-self-in-terms-of-relations-with-others/the-buddhist-concepts-of>

[-the-self-and-dependent-arising](#)

17. Invisible Loyalties in EMDR: Integrating Intergenerational Family Therapy into Trauma Work, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.systemicemdrconsultant.com.au/blog/invisible-loyalties-emdr-family-therapy>
18. JUSTIC AND TRUST, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://repository.ubn.ru.nl/bitstream/handle/2066/64789/64789.pdf?sequence=1>
19. The Transgenerational Cycle: From Memory to Molecule and from Molecule to Memory—The Multilayered Transmission of Trauma - Scirp.org., 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.scirp.org/journal/paperinformation?paperid=147772>
20. Contextual Family Therapy: Assessment and Intervention Procedures, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.prpress.com/Contextual-Family-Therapy-Assessment-and-Intervention-Procedures_p_81.html
21. Contextual Family Therapy - Nessa Maureen Cabiles - Prezi, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://prezi.com/5kiebce85ajt/contextual-family-therapy/>
22. The Acknowledgment, Naming, and Giving (ANG) Activity: A Systemic Self of the Therapist Training Exercise - Guilford Journals, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://guilfordjournals.com/doi/pdfplus/10.1521/jsyt.2015.34.1.1>
23. What's a Revolving Slate? - Dan Loney Therapy, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.danloneytherapy.com/blog/2021/8/15/revolving-slate>
24. What is Contextual Therapy? | Help Center, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://tretbartherapy.com/help/articles/what-is-contextual-therapy>
25. Is the Exoneration-Forgiveness Distinction in Contextual Therapy Evident in Practice, and What Can We Learn From It? | Request PDF - ResearchGate, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/389584330_Is_the_Exoneration-Forgiveness_Distinction_in_Contextual_Therapy_Evident_in_Practice_and_What_Can_We_Learn_From_It
26. Is the Exoneration-Forgiveness Distinction in Contextual Therapy Evident in Practice, and What Can We Learn From It? - PubMed, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/40040440/>
27. Contextual Family Therapy | Genograms & Family Trees for, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://creatly.com/guides/contextual-family-therapy/>
28. 'Good Will Hunting': Brilliant plan between mind, wound, destiny | Daily Sabah, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.dailysabah.com/arts/reviews/good-will-hunting-brilliant-plan-between-mind-wound-destiny>
29. Complex Depression The Role of Personality Dynamics and Social Ecology (Golan Shahar) | PDF | Mental Disorder - Scribd, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.scribd.com/document/823423707/Complex-Depression-The-Role-of-Personality-Dynamics-and-Social-Ecology-Golan-Shahar>
30. Movie therapists: Who got it right? Robin Williams in Good will hunting tops - Reddit, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.reddit.com/r/therapists/comments/1iifcvs/movie_therapists_who_got

[_it_right_robin_williams/](#)

31. Psychological Assessment of Will Hunting in 'Good Will Hunting' | UKEssays.com, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.ukessays.com/essays/psychology/psychological-assessment-will-hunting-8632.php>
32. Common Factors Therapy: A Principle-Based Treatment Framework [1 ed.] 1433838877, 9781433838873 - DOKUMEN.PUB, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://dokumen.pub/common-factors-therapy-a-principle-based-treatment-framework-1nbsped-1433838877-9781433838873.html>
33. EXPLORING THE PSYCHOLOGICAL NEEDS OF THE MAIN CHARACTER IN THE MOVIE GOOD WILL HUNTING - UNM Online Journal Systems, 1月 13, 2026にアクセス、 <https://ojs.unm.ac.id/Eliterate/article/download/74707/34904>
34. 'Good Will Hunting' through the lens of Control-Mastery Theory - Jay Reid Psychotherapy, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://jreidtherapy.com/therapy-good-will-hunting/>
35. Advocating for the Use of Restorative Justice Practices: Examining the Overlap between Restorative Justice and Behavior Analysis - PubMed Central, 1月 13, 2026にアクセス、 <https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC8385698/>
36. Full article: Getting to Accountability in Restorative Justice, 1月 13, 2026にアクセス、 <https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/15564886.2024.2333304>
37. Restorative Justice and Trauma: Responding to the Needs and Misdeeds of Young People with Trauma Histories - NIH, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://pmc.ncbi.nlm.nih.gov/articles/PMC11199446/>
38. REVISITING THE FATHER-SON CONFLICTS IN CHINESE FAMILIES FROM A CULTURAL LENS - World Scientific Publishing, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.worldscientific.com/doi/pdf/10.1142/S0219246209000060?download=true>
39. Foundations Of Contextual Therapy:..Collected Papers Of Ivan - Taylor & Francis eBooks, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.taylorfrancis.com/books/edit/10.4324/9781315803852/foundations-contextual-therapy-collected-papers-ivan-ivan-boszormenyi-nagy?refId=84896d88-79b6-4a07-92a4-82a6352fa98d>
40. The Bridge Between: Contextual Therapy and its Founder Ivan Boszormenyi-Nagy, 1月 13, 2026にアクセス、 <https://www.youtube.com/watch?v=KhfzKnZDQ6s>
41. Rediscovering Nagy - What Happened To Contextual Therapy | PDF - Scribd, 1月 13, 2026にアクセス、
<https://www.scribd.com/document/682016511/REDISCOVERING-NAGY-WHAT-HAPPENED-TO-CONTEXTUAL-THERAPY-1>
42. (PDF) Contextual therapy: brief treatment of an addict and spouse - ResearchGate, 1月 13, 2026にアクセス、
https://www.researchgate.net/publication/20843840_Contextual_therapy_brief_treatment_of_an_addict_and_spouse